

岡本薫著「世間さまが許さない 『日本のモラリズム』対『自由と民主主義』」ちくま新書、筑摩書房 2009年4月10日刊を読む

本当に日本人が「ダメ」なのか 「向かないことは無理にやらない」という選択肢もある

1. レストランで「みんなと同じ物」を注文して何が悪い？

(1) 「ここがヘンだよ日本人」とか「だから日本人はダメ」などといったタイトルの本やテレビ番組がよくあり、その多くは「外国人の意見や批判」を並べているが、著者は昔から、「本当に日本人の方がヘンなのか？」「本当に日本人はダメなのか？」とっていた。

(2) 日本人は、「国際的に見ても、外国人の評判を異常に気にする国民」と言われているが、例えば、日本で何か事件が起きたときに、「そのことが外国でどのように報道されているか」を日本のマスコミがわざわざニュースとして大々的に報道する———ということが、多くの外国人には奇異に見えるようだ。このことについて、西欧にはこんなジョークがあった。「動物のゾウについて何でもいいから本を書けと言われ、ドイツ人はゾウの詳細な『解剖図集』を作り、フランス人は『ゾウの愛とセックスについて』という本を書いたが、日本人は『ゾウは日本人をどう思っているか？』という本を書いた」。

(3) 外国人の率直な意見や指摘を聞くと、それまで「当たり前」と思っていたことの意外な価値や、あるいは逆にそのおかしさに気づかされ、目からウロコが落ちることがある。しかし、そうした意見や指摘は、「日本人自身がより幸せになるための参考」「日本人が『日本人が目指す方向』に進む上での参考」として聞けばいいものである。出身国や文化や宗教を異にする多くの外国人が、それぞれの文化・慣習・モラル・教義などをもとにして述べる——すなわち、前提となっている価値観や方向性が全く異なる——バラバラな意見や批判にすべて従っていたら、支離滅裂になってしまうだろう。「耳を傾ける」ということと「言われたとおりにする」ということは、全く別なのである。

2. 批判のベースとなる文化自体がバラバラ

(1) 外国人の意見は基準がバラバラだということについて、いくつか例をあげてみよう。例えば、大学における教授と学生の関係について聞くと、西欧から来た留学生は「権威主義的な関係が根強い」と答えることが多いが、東南アジアから来た留学生の多くは「フランクで友人関係のようだ」と答える。また、年長者に対する日本人の態度について、韓国人の多くは「無礼だ」と感じるが、アメリカ人の中には「封建的・家父長的な体質が残っている」と言う者も少なくない。さらに、日本での男女関係について、フランス人の多くは「前時代的だ」と言うが、アラブの人は「ふしだらだ」と言う。もっと言えば、かつて日本のある総理大臣が女性スキャン

ダルで辞職したときにアメリカとフランスで行われたアンケート調査の結果を見ると、アメリカ人の多くが「辞職して当然」と答えたのに対して、フランス人の多くは「総理の仕事をちゃんとしていればいいのであって、プライベートな問題で辞職させられるのはおかしい」と答えていたのである。

(2) このように、日本人の思考様式・行動様式について、同じものを見聞きしても、各国・各民族の文化的背景(それぞれにとって「当然であること」や「正しいこと」)の差異によって、外国人の反応はさまざまであり、「外国人からこう批判されているのだから、改めるべきだ」などと言うのは全くナンセンスな反応である。彼らの意見や批判自体がバラバラなのだから、すべてに対応すること自体がそもそも実行不可能なのだ。

(3) ちなみに、イスラム教は日常生活に深く入り込んで様々な戒律を守らせる宗教だが、例えば毎日数回の礼拝や断食などは、西欧では漫才や喜劇映画などで常にギャグやジョークのネタにされてきた。しかし、どんなに揶揄されても彼らは決して行動を変えようとしないので、欧米でも「一目置かれる」存在となっている。例えば政府も、「この政策を実施したら国内のイスラム教徒はどう反応するか？」ということを実際に考えざるを得なくなる。これに対して、外国人からちょっと何か言われるとすぐに過剰反応し、常にフラフラして基本的な方向性が定まらない民族は、決して尊敬も尊重もされないのだ。

(4) なお、この本で言う「文化」とは、いわゆる「広義の文化」であって「狭義の文化」ではない。「広義の文化」とは、ある民族の中で多くの構成員に共有されている「思考様式・行動様式などの総体」であり、良いとか悪いとか、正しいとか正しくないとかいった価値とは無関係のものである。これに対して「狭義の文化」とは、広義の文化の中から「何らかの価値基準」によって選ばれた「良きもの」を意味する。例えば、美術・文芸・音楽などの芸術、学術・科学・技術、法制・社会制度などがこれに含まれる。

(5) 「広義の文化」が異なっていると、それぞれの文化において「普通であること」や「当然であること」、また、「善であること」や「悪であること」などのスタンダードが違ってくるが、それらはいずれも、客観的に見て正しいとか正しくないといったものではなく、価値的に中立的で相対的なものである。

3. ボクたちってこうなの。何か迷惑かけてます？

(1) 著者は、フランスにある OECD(経済協力開発機構)という国際機関で研究担当の国際公務員を二度勤め、合計数年間フランスに住んでいたが、食べ物に対する個々人の嗜好や個性についてこだわりの強いフランス人から、「日本人ってレストランで注文するときに、最初の人注文した物を全員が横並びで注文することが多いけど、あれってヘンだよねぇ」と言われることがよくあった。

- (2)このような指摘を聞くと、日本の自虐的なマスコミや有識者・文化人などは、「依然として集団主義が残り、個性を大切にしない日本人の問題を、身近な事例から鋭く指摘したものであり、我々は反省が必要」などと、したり顔でコメントすることが多い。多くの日本人も、なぜか「やはり自分たちはヘンなのだ」とか「自分たちは間違っている」とか「自分たちは遅れている」などと感じてしまうことが多いようだ。
- (3)しかし著者は、そう言われたときはいつも「ゴメンね。ボクたちってこうなの。何か迷惑かけてます？」と問い返していた。本人が自らの自由を行使し、「同じ物を注文した場合」と「違う物を注文した場合」のメリット・デメリットを比較し、「同じ物を注文する」という判断をしているのは、総合的に見て「その方が幸せだから」である。他人に迷惑をかけていない限り、外国人からモンクを言われるスジ合いなどはなく、当然のことながら、それに迎合する必要もないのだ。
- (4)念のため付言すれば、これは「自分たちの文化に誇りを持って」という趣旨ではない。「誇りを持つ」とは「価値あるもの、優れたもの、他に勝るものだと考える」といったことだが、それぞれの「広義の文化」は単に「違っている」だけであり、価値的に中立・相対的なものだ。したがって、それぞれの「広義の文化」は、「誇るべきもの」でもないし、同時に「卑下すべきもの」でもない——というだけのことである。
- (5)「他人と同じであることによって安心する」というのは、右翼団体のメンバーから共産主義団体のメンバーまで共通する(すなわちイデオロギーとは関係しない)日本人の文化のひとつの側面である。著者が日本文化を勉強し始めた学生のころには、例えば「反体制を標榜する過激派学生たちのグループ内部の社会構造や人間関係は、実は極めて保守的で日本的」とか、「暴走族の高校生の方が一般の高校生よりも、モラル感覚は保守的」といった研究成果がたくさん報告されていた。そのような文化を持っていることそのものについて、卑下する必要は全くない(同時に、誇るべきものでもない)のである。

4. コロロジの視点から見ると

- (1)ところで、著者が「外国人からの批判を受けて、いちいち右往左往する必要はない」「迷惑をかけていない限り、日本人が幸せを感じるように行動すればよい」ということを強調するのは、国粋主義者・民族主義者だからではなく、価値的相対主義者だからである。
- (2)著者の専門は、地理学の一つである「コロロジ」だ。昔はこれが地理学全体とイコールだったのだが、「系統地理学」というものが出現・普及してからは地理学の中のマイナーな一分野になった。コロロジは、特定の地域について分析と描写をする学問であり、描写に重点が置かれていた昔は「地誌学」と訳されることが多かったが、分析に重点が置かれるようになってからは「地域地理学」と訳されることが多くなった。ある辞書をもとにその定義を述べれば、「ある地域内の自然的・社会的・経済的・文化的な諸現象について、それらの相互関係・因果

関係を分析・発見・描写する学問」ということになる。語源となった「コロス」は、ギリシャ語で「場所」を意味する。

(3)分析・発見・描写をするだけで「真理の探究」はしないので、コロロジエは科学ではない(日本では、「ヒューマニティーズ」が「人文科学」と誤訳されていることに象徴されるように、「科学」と「学問」が混同されているが、真理の探究をしない学問は科学ではない)。地域内の諸現象の全体を見るオーバービューを持ち、フィールドワークによって種々のファクターを検証・分析し、「誰も気づいていなかった要素・原因」や「見落とされていた相互関係・因果関係」を発見するのが、コロロジストの研究である。

(4)ちなみに、こうした分析・描写を「空間的」に行うのが本来の地理学であり、「時間的」に行うのが本来の歴史学なので、ヨーロッパの古い大学では「地歴学部」とか「地歴学科」といった括り方が多かった。しかし後に、(歴史学についても同じことが起こったが)西欧の地理学者の多くが「科学」を目指し始め、科学の一部として真理の探究を実証的に行う「系統地理学」を創始した。その結果、精緻な真理探究を追求したことによる研究分野の細分化が起こり、系統地理学は「自然地理学」「人文地理学」「社会経済地理学」や、さらにこれらの分派としての地形学、気候学、生物地理学、経済地理学、社会地理学、文化地理学などに細分化されていた。これは、科学を志向する人々にとっては「進歩」であり、地域研究の総合性にこだわる人にとっては「地理学の本質である総合性の破壊」である。学校で教えられている地理学の多くは、悪く言えば「各地域の現状や系統地理学各分野の研究成果を覚えること」だ。

5. 「劣っている」のではなく「目標とのミスマッチ」があるだけ

(1)ところで、コロロジストとして地域を総合的に見るときに最も重要な心構えは、例えば「ドイツはパプアニューギニアよりも進んでいる」とは絶対に言わないということだ。硬く言えば、コロロジエの本質は「価値的相対主義」にあるということである。多くの人は「ドイツは先進国で、パプアニューギニアは途上国だ」と思っているが、それは、無意識のうちに「BMW を作れることに価値がある」という価値基準を設定してしまっているからだ。しかし、ちょっと価値観を変えて、「家族単位で独立・自活し、ジャングルの中で自給自足していけることに価値がある」という価値基準を設定すれば、「パプアニューギニアの方が優れている」ということになる。

(2)このため、地域を客観的・総合的に見ようとするときには、いったんすべての価値観を頭の中から取り去り、価値中立的な目を持つ必要がある。自分自身の思想や価値観まで捨て去る必要はないが、それすらも「ひとつのファクター」として客観的・中立的に上から俯瞰できる「もうひとりの自分の目」を持っていなければならない。あらゆる価値観・思想・イデオロギー・倫理観・モラル感覚・道德観・道義観などをすべて「相対化」できないと、純粹に客観的な観察眼は持てないのである。

(3) こうしたコロロジスト = 価値的相対主義者の目から見れば、 国の人 は「優れている」とか「劣っている」とか「進んでいる」とか「遅れている」とか「ヘンだ」といった論評は、すべて偏見である。言うまでもなく、世界の中の諸民族・諸国民は、それぞれ独自の文化を持っており、それぞれが持つ異なる価値観・倫理観・モラルなどは、どれが正しいとか優れているといったものではない。したがって、「絶対的に優れた民族」や「絶対的に劣った民族」などというものは存在しないのである。

(4) つまり、ある文化を持つ人々は、他の文化を持つ人々から「そのような考え方や行動はおかしい」などと言われるスジ合いはないのだ。「そのような考え方は、我々とは違う」とか「そのような考え方はキライだ」とか「そのような考え方や行動は、××には向かない」と言えるだけである。また、単に「我々とは違う」という場合には相互に何の問題も起きないが、「我々とは違っており、我々に迷惑をかけている」という場合に、話し合いや交渉を通じた歩み寄りや、ルール作りが必要になるのである。

(5) 前記の「そのような考え方や行動は、××には向かない」という場合は文化の優劣を議論することができるが、これは、「××」という「目標」が人工的に設定されているからだ。すなわち、特定の「目標」を前提にすれば、あくまでも「その目標を達成できるかどうか」という観点からではあるが、文化の優劣を論じることが可能になる。例えば、「速く走れる車を作れる」ということを「目標」として人工的に設定するならば、「現在のドイツ人は、現在のパプアニューギニア人よりも優れている」ということが言えるだろう。

(6) 同様に、「独創的な科学研究をする」ということを「目標」として人工的に設定すれば、「独創的な科学研究のためには、 人の文化が優れている(研究に向いている)」といったことが言える場合があるし、「遊牧をする」ということを「目標」として人工的に設定すれば、「遊牧という生産システムのためには、××人の文化が優れている(遊牧に向いている)」といったことが言える場合がある。しかし、これらは要するに、単に「それに向いている」というだけであり、「どのような目標を設定するか？」によって優劣は異なってくる。したがって、絶対的な優劣ではなく、相対的な「向き」「不向き」や「得意」「苦手」や「ミスマッチの有無」であるにすぎないのだ。

6. 本当に「文化を変える」必要があるのか？

では、何について、国民全体として「向いていない」とか「向いている人の数が少ない」という場合、その民族はどうすべきだろうか。例えば、「自然科学に関する独創的な研究成果を得て産業に活用する」という国家の目標が人工的に設定されたが、その民族が独創的な科学研究に「向いていない」という場合、彼らはどうすべきだろうか。

7. 「向かないことはやらない」「他民族にやってもらおう」という選択肢もある

- (1) 対応策の第一は、「向かないことは無理してやらない」ということだ。これもひとつの戦略である。硬く言えば、いかなる手段をとっても「コストがベネフィットを上回る」のであれば、「やらない」という判断が正しいだろう。この「コスト」には、「国民の(一部の)文化を人工的に変える」という文化革命的な作業に要するコストだけでなく、「それによって発生する副作用」というものも含まれる。
- (2) 人々が自然に獲得している内心や思考様式・行動様式を「国家の都合」で人工的に変えようとするものの是非はさておくとしても、多くの人々を対象として「文化を変える」ということをするためには、通常は膨大なコストがかかる。また、仮にそれに成功したとしても、それはいわば「人間に関わる複雑な生態系」の一部のみを人工的に変えてしまうということであり、環境問題と同様に別の所で思わぬ副作用をもたらすことが多い。
- (3) 例えば、高度で独創的な科学研究には「他者に迎合しない強烈な個性と常に自己主張する態度」が必要だとしよう。この場合、多くの人々にそうした思考様式・行動様式を持たせたら、科学研究はうまくいくかもしれないが、社会全体を殺伐としたものにしてしまう可能性もある。「だから『うかつに生態系の一部をいじってはいけない』のと同様に、極めて複雑な人間社会(人間の生態系)の背景にある文化の一部を、うかつにコントロールしようとはしない」というのが、この第一の選択肢である。
- (4) 第二は、「向いている人を探して鍛える」ということだ。「人はこうだ」と言っても、人々には多様性があるので、たまたま「向いている人」もいるだろう。例えば、日本人でノーベル賞を獲得した人も少数ながらいるのだ。そうした人を探し出す努力をして彼らを鍛えるというのが、この選択肢である。この場合の課題は、どうやって探し出すか、必要な人数を確保できるか、彼らの国外移住を防止できるか、といったことだろう。
- (5) 第三は、「向くように文化を変える」ということだ。もちろん、「国民の文化を人工的に変える」ことのコストが(あらゆる副作用の発生も含めて)それによって得られるベネフィットを下回る、という場合の選択である。
- (6) この対応策が機能するためには、まず、「人々のそうした文化(思考様式・行動様式)は、遺伝的・生得的なものではなく、学習によって獲得された後天的なものだ」ということが立証・確認されていなければならない。遺伝的・生得的な特質は、簡単には変えられないからだ。次に、そうした思想様式・行動様式が後天的に身につけられているものであれば、それが「どこにおけるどのような経験・学習によって獲得されているのか」を追究・特定し、「そこを変える」という方策をピンポイントで実施しなければならない。
- (7) さらに言えば、はたして「全国民」についてそうした「文化の人工的改変」を行う必要があるのかということも(前記の「副作用」のレベルも含めて)あらかじめ考え、決めておくことが必要だろう。これは逆に言えば、「科学に関する独創的な研究」に「向いている人」は、いっ

たい何人作ればいいのか——ということである。

- (8) 第四は、「外国の『向く人々』にやってもらい、成果だけをもらう」ということだ。例えば、「独創的な科学研究の成果を得て産業に活用する」ために「研究活動はそれに向いている他の民族に任せ、その成果だけを入手する」ということである。これは、「日本の国土環境はバナナの生産に向いていないので、無理してバナナを作ろうとしたり、バナナのことだけを考えて環境を不用意にいじったりせず、バナナ生産に向いている他国でバナナを作ってもらい輸入する」というのと全く同じことだ。
- (9) 独創的な科学研究について言えば、例えばアメリカ人がそれに「向いている」なら、アメリカの大学や研究所にお金を出して研究をしてもらい、「特許権はこちらがもらう」という契約をしておけばよい。バナナを輸入するのと同じように、これは「向いている」ということ(の成果)をお金を出して輸入するということだ。この場合は、国内で生態系をいじることによる副作用はないので、「提供する資金」と「得られる成果」だけを単純に比較して、後者が大きければそうすればよいのである。
- (10) 著者が OECD で国際比較研究を担当していたテーマのひとつに、「政府レベル・大学レベルでの留学生受け入れ拡大策」というものがあった。日本とアイルランドを除く先進国は 1980 年代に 18 歳人口の急減を経験したが、新入生の学力を下げずに学生数を維持して大学の経営を成り立たせるために、「ニュー・クライアルテール」(新しい顧客)の開拓が必要になった。このため各国で「成人学生」と「留学生」の拡大策が実施されたのである。これらのうち留学生については、多くの国の多くの大学が、文化を異にする留学生たちがその国での生活や教育に慣れるよう、さまざまな方策をとり始めたが、「留学生の文化に合わせる」という方策も少なくなかった。
- (11) しかしアメリカの大学の多くは、「独創的・創造的な研究を行うには、アメリカの文化が最も優れている」という強烈な自信を持ち、絶対に留学生に合わせようとはしなかったのである。ここで言うアメリカの文化とは、例えば、授業の内容も批判的にとらえるとか、相手が教官であっても自分の意見をハッキリと主張するとか、他人の意見に流されないでオリジナリティーを追求する、といった文化だ。留学生への対応は、そうした文化への適応・移行を助けるとともに、母国へ戻るときに再適応を助けるといったことであり、その文化自体は絶対に留学生に合わせようとはしなかったのである。アメリカの大学の実績を見れば、それは正しい判断だろう。
- (12) そうした状況を見て著者は、前記のようなことは多くの日本人には「苦手」なことであり、日本からアメリカに行った留学生の多くもそうした文化への適応に苦労しているのだから、それが好きで得意な日本人は別として、「なにも日本人全員が苦手なことを苦労してやらなくても、アメリカ人が研究がお得意なら、お金を出してアメリカ人にやってもらい、特許権だけもらえばいいのではないか？」と常々思っていたのである。

(13)このように、科学研究ひとつを取ってみても、国民全体として「向いていないこと」への対応策は、最初から諦める、一部の「向いている人」を探す、一部の国民を留学などで「向いている人」に作り変える、国民全体を「向いている人」に作り変える、お金だけ出して「向いている民族」にやってもらい成果だけを手に入れる——など、さまざまな選択肢がある。どれを選ぶかは、副作用などのリスクも考慮し、それぞれのコスト・ベネフィットを考えて決めるべきことだろう。

(14)自国の国土・人口や文化を考えず、「なんでもかんでも世界一に」とか「なんでもかんでも自前で」と言う人は、実は「バナナもパパイヤも、いくらコストがかかっても、全国の土壌を変え、全国に温室を作って中でストーブをたいてでも、すへで世界最高品質のものを国産すべきだ」(日本人は優秀だからできるはずだ)と言っているに等しいのだ。

P12 ~ 27

[コメント]

価値的相対主義のものの見方はどのようなものかが岡本先生の具体的な説明で少しずつ明らかになったら本書を買い求めて手元におき、何回も読み直して詳しく勉強して頂きたい。必ずよい勉強になると確信する。

- 2011年5月19日林 明夫記 -